

飼育環境の改善によるインドサイの蹄病変の治癒例

○先崎 優

(公益財団法人横浜市緑の協会 金沢動物園)

飼育下のインドサイでは、足底の亀裂や過長蹄など後肢の蹄病変が世界中から報告されている。足底の亀裂は真皮層の露出や組織の異常造成を伴い、歩行のたびに出血を繰り返すこともある。国内でも複数の個体で蹄病変がみられ、治療が試みられているが完治した例は知られていない。

当園で飼育されているインドサイ（雄、32 歳）は、1992 年に足底の亀裂が確認され、1996 年に左後肢から出血、1998 年には両後肢の出血や足底組織の異常造成が生じていた。

○年に担当となり、2010 年 5 月からインドサイの飼育環境の見直しを行った。湿地帯で生息するインドサイの生態を考慮し、寝室床面（25 m²）の柔軟性を高める取組みとして、床面コンクリートの上に畳や乾牧草を約 50 cm の厚みに敷き詰めた。2011 年 6 月、砂や真砂土の展示場（500 m²）の約半分をウッドチップに変更し、2012 年 5 月には全体に広げた。2013 年 3 月には展示場の地下に埋もれていたコンクリートの基礎を撤去する改修工事を行った。飼育環境の変更と並行し、これまで行っていた患部への尿素含有製剤の塗布や削蹄、造成した足底組織の切除等の対症療法を継続した。

2011 年 6 月には足底組織の異常な造成が見られなくなり、真皮層の露出部も縮小する傾向が見られた。2013 年 3 月の改修工事後、足底の真皮層の露出部は急速に縮小し、7 月には右後肢の亀裂が無くなった。左後肢足底は 2014 年 3 月に真皮層の露出部が見られなくなり、2015 年 5 月に亀裂が無くなった。亀裂の再発や蹄の過長は認められず、蹄病変は完治した。

これらのことから、飼育下にみられる後天的な慢性疾患は不適切な飼育環境に起因する可能性が示唆された。動物本来の生態を理解し、本質的な環境条件を再現することが重要である。